

図書紹介

◎東南アジアの森—自然を読み！ 梶尾昌秀著 A5版 271pp. KKゼスト，東京，1998.3刊 定価2,800円（税別）

「本書は国連食糧農業機関（FAO）に勤務し，日本を永く離れて国際社会で生活してきた私からの，日本の皆さんにどうしても伝えたい，聞いてもらいたいメッセージである」という書き出しで始まるこのレポートは「東南アジアの森林と人々が，いかに共生していくかという地域の問題にとどまらず，地球上の全ての人々が考えていかなければならない，私たちの文明のありようが問われる，明日の地球の問題である」という著者の問題意識を発露したものである。第1章「熱帯林問題とは」では熱帯林が直面している問題を概括的に，しかし実際の体験や豊富な資料を素に解説している。人工造林，コミュニティフォレストリー，アグロフォレストリーの可能性を検討し，「日本や欧米諸国の人々の夢とは多少違った，その意味では新しいスタイルの人間の暮し方」への期待で結んでいる。第2章「東南アジアの森林事情—過去，現在，未来」では，タイなど9か国の森林・林業をその歴史から説き起こして現在に至る状況を解析し，問題点を摘出して将来のあり方を検討している。ここには，森林資源担当官という著者の立場を活かして実際の自然をその目で見て，為政者や研究者，森の人々と直に接してきた迫力のあるレポートが展開されている。第3章「森林と人間社会の関係はいかにあるべきか」では「人工林はいけないのか」「焼き畑が熱帯林消失の元凶か」と，林学徒である著者の面目躍如である。例えば，問題となっているユーカリ植林—環境問題については，科学的な立場から問題点のすり替えであることを指摘し，住民軽視の行政や情報収集の不足，感情や対立をあおり，売れる情報商品を求めるマスコミや一部のNGOの姿勢を看破している。そして「新しい森林管理システムとは」として社会林業を検討し，最後に「自然科学，社会科学の分野と共に，経済学分野の研究も組み合わせた『森林環境総合管理法』の研究の必要性」を提案した上で，森林の未来は文化や文明を考えることであり，「森林の管理を地元社会にまかせる，あるいは国家にまかせるだけでは，完全に解決できない大きな普遍的課題がここに存在している」という，巨大な問題の提起で本書を終えている。本書は，本物の情報が詰まった，現在の一方の主流をなす考え方が披瀝されている本であり，熱帯アジアに興味ある人たち，そこで働こうという人たちにはぜひ読んで欲しい本である。（桜井尚武）